＜読書感想文総評＞
優秀作品集まる
小、中学生読書感想文

本を読んで、書いてある事柄や作者の真意を正しく理解することが、本を読む際の第一条件である。これに対して自分の考え、感想意見をまとめることが読書感想文ということでしょう。

昨年暮、募集した読書感想文は各小中学校の子どもたちからたくさん応募をしてもらいました。応募された作品は何れも前の感想文の意義に適応したよい作品ばかりで、選ぶのに困難しました。応募要項の中に順位をつけるように案内しましたが、何れも甲乙つけがたいので応募者の氏名を発表させて頂いて報告にかえます。その中から特徴的なものを順次発表致します。

【小学校低学年】小杉小一年、えんどうひろみ、はがひろみ、木津小一年、たにいゆうこ、さとうかな、横越小一年、たなかこうじ、木津小二年、谷井正子、渡辺美香、小野塚悦子、沢海小二年あびこしず、横越小二年、かとうまほ、小杉小二年、さいとうゆみ。

【中学年】木津小三年、栗山明子、横田和美、野口優子、山田昌子、今井美幸、今井智子、斎藤里香子、大竹広恵、青木康子、小柳美和子、横越小三年、神田正昭、武藤みゆき、小杉小三年、桜井享、木津小四年、栗原利佳、和田政美、横越小四年、小林ひろみ、武藤富美子、沢海小四年、藤田小百合小杉小四年、宮沢聡、小杉小三年、長谷川順。

【高学年】横越小五年、建部まゆみ、佐藤千代子、由野和美、塩井勝小杉小五年、宮嶋桂子、木津小五年、田中洋生、植木大輔、井越あけみ、大竹かおる、佐藤長幸、遠藤広子、谷井一弘、伊藤恵利子、井越美夏、永木護、入山昭彦、佐藤豪、田代亜由美、小畑ヒデ子、今井幸美、沢海小五年、杉本美和子横越小六年、加藤志保、栗原美由貴、小杉小六年、田村恵美、関根不二子、羽賀美津子沢海小六年、久保田幸栄木津小六年、青木紀子。

【横越中学校】一年、石倉優香、米木友子、遠藤明子、江口久美子、田中裕美子、二年、石倉恵美子、山崎志摩子、永木誠子、荒井斎、斎藤富美夫、三年、坪谷郁子、石井秀子、渋谷恵美子、岩橋徳則、石塚正子、武藤恵子。

「おかあさんの一日」をよんで
小杉小一年　えんどうひろみ

ひろしくんのうちで、一ばん早くおきる人は、おかあさんだよ。わたしもそうだよ。だからあさはさみしいよ。

ひろしくんは、おかあさんや、おとうさんに、「おはよう。」といわれるけど、わたしはねぼうをすると、おとうさんやおじいさんに、いわれなくなってしまうよ。

わたしのおかあさんは、にいがたへしごとにいき、はやでのときは、あさ五じごろおきて、六じごろかいしゃにいくんです。だから、「おはよう。」はいわれないので、あさ目がさめると、すぐ「おかあさん、かいしゃにいったかな。」と思うんだよ。でもがまんしてなかないよ。

学校で、しゃかいのじかんに、先生から「しゃかいのじかんに、おとうさんやおかあさんに、こうばでなにを作っているか、きいておいで。」といわれました。そうゆうときは、夜おそくしかきかれないんだよ。

ひろしくんたちは、あさおきるとラジオたいそうをやるね。えらいと思ったよ。わたしはなまけてしないので、からだがかたくなってしまったみたいだよ。こんど早くおきて、ひろしくんたちとおなじに、ラジオたいそうをやってみるよ。

海外研修視察記

十二月の広報でおしらせしましたが、横越中部落の神田勝郎さんが、青少年指導員として、全国の二十二名と共に約一か月間ヨーロッパ五か国を回ってこられました。この視察についての感想を寄せていただきました。これから三回にわたって掲載いたします。

ヨーロツパ五か国をめぐつて
教育の持つ意味は重い
神田勝郎

二十七日間に亘った青少年育成指導員のヨーロッパ五か国研修が有益にしかも無事終了しえた事をまずもって感謝いたします。

地元関係者、県並びに国民会議事務局、各国受入機関のご厚意に対し心からお礼を申し上げます。

ヨーロッパと五か国の、それも僅か一地方、一都市をもって全ての青少年事情に精通したとはいえない。見聞したものを、できるだけ短絡させないで、二、三の視点を中心に、きわめて印象的に感想をのべてみたい。

①学校教育

学校教育についていえば、イギリス、ドイツ共に教育の機会均等と、能力主義という二つのテーマをめぐって模索している状態だといえよう。

イギリスでは、十一才の時の試験で早々と、グラマースクール、モダンスクール、テクニカルスクールの三つに分けてしまう。このことは公平を欠くとの配慮から、多様な能力を持った子供たちを、コンプリヘンシブという選別しない形で教育しようと試みられている。このことは、ドイツのケルン総合学校でもみられた。従来、小学校四年生を了えると、ギムナジューム、レアールスクール、ハウプトスクールの三つに分けていたものを、将来の進路を十才位で判断させるのは時期早尚であること。

どこの学校を選ぶかは親の受けた教育や社会的地位によってきまる。

こういう弊害をなくする為に、五、六年生は生徒の能力にかゝわらず、一緒に教育するといった試みがなされている。デンマークでは、職人の子供が高校へ進学したいのに、父親が、「職人の子供は進学する必要はない。」という話を聞かされ、社会構造階級制の名残りについて考えさせられた。

高校進学率が九十%を越えた日本からみると三十～五十%前後のイギリス・ドイツ・デンマークには、早くから金を稼がなければならない事実や、日本的な学歴社会でないことや、継続教育の充実等に起因する理由を見出すことができる。チェコでは、プラハ市内の小中統合学校でみられた子供たちも、チェコ城内「子供の家」でみた子供たちも、一様に整然としていたし明るい顔であった。チェコの教育が、「人間に自由を与えるものであって、貧しい人々に不利ではない。」という大学教授の説明も理解できたが子供達をみていると、教育の持つ意味が益々重くなってくるのであった。（続く）

イギリス セント、セレサカソリック女子中学校図書室で

「ホットケーキ」「さつま汁」作りを楽しむ
―第7回少年教室を開催―

県内で、三万三千人（全国で百六十七万人）が成人の仲間入りをしたこの日、「第七回少年教室」を開きました。寒い季節なので出席が少ないとこまるのだがと思っていたら、各学区からいくつものグループを作りながらやって来た。公民館へ入るなり元気にあいさつをかわし、会場へいく。

午前中は「ホットケーキ」と「さつま汁」の作り方だ。指導は公民館の荒木さんにお願いする。

まず十名位に分れて班をつくり四班編成する。そして四ッのなべを用意する。女の子はエプロン、男はさつまいもの皮をむいたり、大根を切る。ねぎや、にんじんをきざむ女の子等、一ッの動作にいろいろ言葉が飛びかう、とてもにぎやかだ。

火をかけて出来るあいだに「ホットケーキ」作りだ。たまご、小麦粉、牛乳をとても器用にかきまぜている男の子、やわらかすぎて〝タマゴ焼き〟のようなものができてしまった子もいる。

さて、中食の時である。

各自で用意して来た中食で今日作ったものを食べる。「たとえ味は悪くとも、自分達で作ったものだから、残さず食べましょう」という約束をする。でも、さつま汁のきらいな男の子が十名余りいるのには驚いた。

そもそも味噌汁が嫌いなのだという。

少し休んで伊藤成夫氏（元村長）の「文化財について」という話を聞いた。この村にもいくつかの史跡が保存されているが、文化財というものについてまだ子供達の関心は薄いようだ。メモをしながら聞いている子供もいたが、子供達どうしで、がやがややっているものもいる。でもこの中から歴史に興味を持ってくれる人が何人かでてくれれば幸いである。

第3回村民新春俳句大会開催
席題は「雪」「寒鮒（かんぶな）」「手袋（てぶくろ）」

横越の俳句活動が今から約二百年前にすでに始まっていたことについては、広報の十二月号（横雲橋）でおしらせしました。

日本で俳句という名称で一般に用いられるようになったのは、明治中期の正岡子規にはじまったと考えられているそうです。

そして俳句の大事な約束事として、季語（季題などともいう）があります。それは、短い詩が、それ自身の力で読者に訴えるために、より強い具体性を獲得し、より広い連想性をひきおこさせなくてはならないからです。そのためには、季語は打ってつけの性質をもっています。

いわば季語は、時間と空間との切点であります。「春風」といえば快く暖かい季節と明るい広々とした外景を思い浮かべることができ、「吹雪（ふぶき）」といい「囲炉裏（いろり）」というも同じ効果が期待できるのです。

しかも季語には長い文学伝統の味わいや、かおりがつまっているため、俳句の世界でも、もっとも有効なささえとして重視されてきたのです。（中以上、小学館日本百科大事典による）

さて、公民館主催による新春俳句大会は今年で三回目です。降りつづいた雪もようやく収まった二十五日、二〇余名がそれぞれ思いをめぐらし集ってこられました。

渡辺一横越村文化団体協議会長のあいさつのあと「雪」「寒鮒（かんぶな）」「手袋（てぶくろ）」という席題（大会のさいだす季語）に、表現豊かな情緒ある句がそれぞれ披露され、出席者全員による選（互選という）に入りました。今回始めて参加された方は三名余です。ずっと前からやっている人の中にも、今日の「手袋（てぶくろ）」はとても読みにくい、そんな感想をもらしていました。これからもさらにこれらの活動が盛んになるよう期待したいものです。

昭和五十一年新年俳句大会

兼題　一位　今井夫子
〃　二位　今井秀紅
〃　三位　坪谷耕雨
高点句　一位　田村山火
〃　二位　渋谷ウタ
〃　三位　斎藤愛子
席題　一位　坪谷十九一
〃　二位　阿部雄峰
〃　三位　小林竹生

高点句　一位　坪谷十九一
夜夜吹雪妻の民話も佳境につきる

二位　佐藤[illegible]
[illegible]

三位　伊藤吉作
[illegible]